

言葉に出会い続ける歩み

榎山正樹

本願力にあいぬれば
むなしくすぐる人ぞなき

帰敬式は剃刀の儀、おかみそりとも言われます。これは名聞、利養、勝他の三つの髻（もとどり）を断つことを意味します。三つの髻とは、「このことは自分にとつて損か得か」、「人からそしられたくない」、「あなたは立派だね」と言われたい」というようなことです。私たちは自分の価値判断を頼りに生きています。そのことは決してなくなるものではありません。

仏さまから、そういう私たちの姿はどのように見えているのでしょうか。

循環彷徨という言葉があります。循環とは、ぐるぐる回る、彷徨とは、さまようということですが。たとえば、三六〇度何のしるしもない砂漠でぼつんと一人できるところを想像してください。そこから自分が抜け出していこうとする。しかし、何もしるべがありません。まっすぐ歩いていけば、砂漠から出られるだろう

と歩いていく。ところが、人間は、二〇〇m歩くと利き足の方に向かって平均五mずつずれていくのだそうです。まっすぐ歩いているつもりでも、少しずつずれていく。ですから、結局元の場所に戻ってきてしまうというのです。仮に出発点に目印を置いておいたとしても。一週間、ひと月の時を費やし歩いたとしましょう。まっすぐ歩いたと思っていたにもかかわらず、目印のところに戻ってきたら、どんな思いになるでしょう。「ああ、一周したんだな、じゃあもう一回がんばろうか」という気は起きないでしょう。「あれっ」と、まず驚きますね。驚いた後に、どういう気持ちが起こりますか。「私は何をやっていたのでろう」。何もやっていなかったわけではない。砂漠から抜け出そうと思って一生懸命歩いていたのだけれども、その結果を導き出せなかった、となるでしょう。これは親鸞聖人のご和讃の中にある

「むなしくすぐる」ということです。空かといいますが、何にもせずむなしく過ぎたのではありません。ここから抜け出そうと思って一生懸命歩いていたけれども、結果的には同じ所に戻ってきてしまった。目印があつて、そこに戻ってきたら「ああ、一周してきてしまった」とわかりますが、何も置かなかつたら、永遠に回り続けることになります。私たちの人生はどうでしょうか。「私は大丈夫。まっすぐ歩けるから」と思って歩いていないでしょうか。自分にとつて損か得か、自分がそしられないためにどうしたらいいだろうか、自分の価値判断で歩いています。仏さまから見ると、決してまっすぐ歩いていないのです。親鸞聖人は「本願力にあいぬればむなしくすぐる人ぞなき」と顕されました。「仏さまのお心にふれていくという縁を結んだなら、むなしく過ぎる人は一人もいません」と。このことは「仏さまのはたらきや仏さまの声に耳を傾けずに歩いていくということはむなしく過ぎていくことですよ」とも言いかえられるでしょう。自分の人生を充実させるために自分でいろいろ手立てを講じて生きている私たちに、仏さまは「あなたはぐるぐる回っているのではありませんか。こちらに向かって歩くのだよ。少しずつずれていませんか。大丈夫ですか」と、言葉をかけてくださっています。その声に耳を傾けていくのが聞法です。道に迷ってはいないか。まっすぐ歩いているつもりだけれど、ずれているので

はないか。まっすぐではないかもしれない。ジグザグしているかもしれない。しかしそれが確かなものだと思っっている。うちは、循環彷徨から抜け出すことはできないというのが「むなくすぎる」ということです。

私たちは本願力ではなく、財力、体力、知力、権力、労力、いろんなことを私たちのしるべとして生きています。しかし、仏さまから照らされることを通して、それらにしがみつけばしがみつくほど、循環彷徨しているこの身があぶり出されてきます。では、そういうものを捨てて仏の世界に生きられるかというところ、決してそうではありません。三つの髻は、剃刀を当てたからといって、なくなることはありません。私も皆さんも、死ぬまで三つの髻から逃れることはできないのですね。

蓮如上人は「何度お話を聞いても、なかなか自分の腹に落ちてこない。わかったような、わからんような」と話されたご門徒に「籠に水を入れようろうように」とおっしゃいました。籠に水を入れる。籠には目があります。目が細かければ、最初は少しは溜まっているかもしれませんが、しばらくすると、水は漏れていきます。何回聞いても忘れていってし

まう。しかし「聞いてもしようがない」ではないのです。蓮如上人は続けて「その籠を水につけよ」とおっしゃいました。籠を水につけるといことは、この身を、この体を法につけておきなさい。仏さまの言葉に身をつけておきなさいということです。

「目をふさいで、水がもれないようにしなさい」ということではないのですね。水が漏れてしまう身であって、循環彷徨してしまうこの身は変わりません。帰敬式、おかみそりとは、その身のまま常に自分の暮らしをかえりみさせる言葉に出会い続け、歩んでいく誓いをたてるご縁だといたてております。

親鸞聖人の前で厳肅かつ荘厳な空気のはりつめる中で、帰敬式を受けられた、あの空気感は生涯忘れることはないでしょう。これからいろんなご苦労もあるかと思えます。折々にお寺や別院、本山へとお参りいただき、あの時のあの瞬間を心に掛けて、自らの暮らしをかえりみる言葉に出会い続けていく歩みを続けていただきたいと思えます。

以上

榎山 うめやま 正樹 まさき
一九六七年生まれ。名古屋教区第九組教
西寺住職。真宗本願教化教導、前同朋会
館教導、真宗大谷派全国准堂衆会会長。